



ソロモンがイスラエルの王となってから四年目．．．」から、ソロモンの治世の第四年961BCEを出エジプト後四百八十年として逆算することによって割り出すことができ、聖書が裏付けているものです。また、エリコの陥落に関する昨今の考古学的考察から、パレスチナ地方にイスラエルが入ったのは、1400BCEであることが確認されているのです。しかし、この見解にあえて難があるとしたら、出エジプト記1：11の「パロのために倉庫の町ピトムとラメセスを建てた」という表記ですが、—この表記のゆえに、出エジプトの年代を二百年遅いラメセス二世（1279—1213BCE）の年代とする見解が多くの学者によって支持されてきたのですが— ラメセスは町の名前ではなく、多くのイスラエルの民を住まわせるに十分な広さの帯の地、地域の名前であったことが創世記47：11と27の記述から分かります。すなわち、「ラメセスの地」とはエジプトの民の住む地からナイル川を隔てて隔離されていた「ゴシェンの地」のことでした。また、ラメセス二世が町を建てたと主張したことが偽りであつという発見、町建立の信用が欲しかったラメセス二世が実際にそれらを建てた王たちの名前を消し、自分の名前に書き換えたという情報もあります。この情報は、ハトシェプスト女王（王女時代にモーセをナイル川から引き上げ、養子としたと考えられている女王で、父王トトメス二世の正妃の嫡出子であったことから偉大なる権力を誇った）のゆえに即位が遅れたハーレム生まれのトトメス三世がハトシェプストの名前を記念碑や神殿からすべて抹消したという史実からも、考えられないことではありません。

上述の二人の科学者は、エジプトに下された一連の災い—イスラエルの神のエジプトの神々への裁きとイスラエルの民の解放—を疫学、細菌学、昆虫学、毒物学の知識を駆使して次のように考証しました。

1. 最初の災い、『血に変わったナイルの水』（出エジプト記7：19—21）は、ある種の藻類の繁殖による赤潮の発生で起こりうる。この藻は酸素を吸収し、魚を殺す毒素を放出するため、水中の生物は死に、水は臭くなる。また、温暖な静水に突然発生するが短命で、二、三日で消失する。
2. 一匹が何十万個の卵を産む繁殖力旺盛な「かえる」（8：1—7）は、ナイルの水が腐敗し、食べるものがなくなったため、えさとなる虫を求めて、明るく暖かいところに集まる習性の『ひきがえる』であった。
3. 第一、第二の災いで自然界のバランスが崩れたことにより増殖し、人間と動物を襲ったのは吸血虫の蚊、『ゆすりか、ぬかか』の類とみなされる。今日の昆虫の分類は聖書の記述より千年以上後にアリストテレスによって初めて着手されたことなので、聖書では「しらみ」あるいは「ぶよ」（8：16—17）と表記。
4. ナイル川の魚と両生類の死により汚染した水が引くと、3. と、この災いが起こる。群生する「はえ」（8：20—21）はおそらく『家畜ばえ』で、家畜に噛み付き、痛みや害をもたらし、二次感染を引き起こす。
5. 『家畜を襲う疫病』（9：1—3、：6）はおそらく、『アフリカ馬病』で、ひづめのある哺乳動物だけが侵される。4. の家畜ばえは狭い領域内でしか移動しない比較的弱いはえで、川を越えてゴシェンの地に飛ぶことはなく、イスラエルとエジプトの家畜とが区別される現象が起こったと考えられる。
6. 「うみの出る腫物」（9：8—10）は、すでに「忘れられた病」と思われていたリンパ組織を侵すリンパ腺のできもので、実際には中東、アフリカで今日も発生している。4. の家畜ばえの媒介による二次感染が原因で起こったと考えられる。
7. 「雹」（9：22—26）は熱い地域でも生じる自然現象で、サイズは12mm～13cm大にも至り、危害は大きい。最近の例では、1997年10月、イスラエルとヨルダンを襲った雹は、1mにも積もったのであった。
8. 「いなご」（10：12—15）の群生は今日でも結構起こっており、北アフリカ、中東からインドのパンジャブ地帯にかけてよく発生する。地にある穀物、青菜、果物から樹皮まで完全に食い尽くしてしまう。
9. 『さわれる闇』（10：21—23）は、「さわれる」と明記されているように、サハラ砂漠からの熱い南風によってもたらされる『砂嵐』と考えられる。3～5月にかけて発生すると、二、三日は続き、太陽は遮断されて暗闇に覆われることになる。古代エジプトの墓や、スフィンクス、碑文などが砂の下に埋もれ、今日まで守られてきた理由はこの砂嵐にある。1997年春、カイロはこの砂嵐に見舞われた。
10. 最後のエジプト中の『初子の死』（11：1、：4—6）に関して画期的な解明が提示された。突然死の原因はかびの胞子によって引き起こされる中毒で、生み出された猛毒が肺から血液に入り、体内出血を起こし、死に至らしめるもので、猛毒マイコトクシンが湿った倉庫に蓄えられた穀物に繁殖したと考えられる。繁殖の最適温度26.7～43.3度、湿度62～99%、胚芽内の水分含有量13～20%の条件で考えられるのは、雹、いなごの害でほとんどの穀物が失われたエジプトが十分乾燥させないで大あわてで暗くて湿度の高い倉庫に取り込んだ初物の穀物にかびが繁殖したということで、世継ぎとなる長子優先の社会にあって、希少の穀物からの食事に最初にありつけたのは、「王座に着くパロの初子から．．．女奴隷の初子．．．家畜の初子」、すなわち長子で、皮肉にも悲劇はまず長子に起こったのであった。

この出エジプトの出来事における神の出現『シオファニー』は、千五百年後、イエス・キリストによって完成されることになる人類の罪からの解放における『シオファニー』のひな型、予型だったのでした。